

それらのものが「奇(こ)  
すしき(不思議な、神秘的な  
力(りき)」を持つことから  
「くすり」と呼ぶようになっ  
たと田雲大社の古文書にあ

昔は「草根木皮に宿る神  
秘的な靈魂が傷病を治癒す  
る」という観念が洋の東西  
を問わない通念で、そのた  
め神仏に祈ることも大切で  
した。しかし、約200年前、  
西洋で薬に含まれる有効成  
分(薬物)が効能の本体で  
あることが解明されて以降、  
薬は科学的に大きく発展し  
ました。

うやら犬は特定の草がくす  
りになることを本能的に  
知っているようです。

一方、人様には残念なが

### 薬のはじまり

散歩途中のワンちゃんが  
道端の草を食べるのを見か  
けたことはありませんか?  
わが家の日本犬ノン君は調  
子の悪い時に散歩中ある決  
まつた道草を食べます。ど

らそんな能力はありません  
が、色々な動植物体や鉱物  
が傷病に効くという大昔か  
らの経験則が、世界文明發  
祥地を中心に糾余曲折を経  
て伝承されてきました。

るそうです。草木によつて  
体が楽になるので、日本で  
は「くすり」に「藥」(中国  
語は「药」)の字を当てたと  
する説が有力です。

傷病や手術などに起因す  
る目に見える苦痛を取り除  
くことだった薬の当初の役  
割は、今や病気の予防、心  
の病や不眠の治療、美容や  
体質改善などにまで広がり、  
人々の良質な生活(QOL  
= Quality of Life)を大き  
く下支えしています。



<1>





<2>

る間、額田王（ぬかたのおおきみ）が薬草摘みを楽しんだ時の情景を歌つたものだそうです。

歩くのに適していました。  
中でも山伏姿の忍者は加持  
祈祷してお札や薬を売り歩  
きつつ諜報活動したそうで  
す。

「置き薬」という画期的な売薬方式（富山発祥）が採り入れられ、繁盛に伴い製薬業も明治以降、盛んになりました。

この方式は傷・胃腸病・頭痛・風邪の薬・絆創膏などの常備薬一式を詰めた薬箱を僻地の家庭に各一つ置き、半年に1回程度訪れては使用分を補給し代金を徴収するというものです。

A cartoon illustration of a man with glasses and a cap, smiling and holding a stack of brown paper packages.

近江の肥沃な鈴鹿山麓と  
それに続く原野には昔から  
良質の薬草が多く自生し、  
とりわけ伊吹山は今なお薬  
草の宝庫として有名です。  
古来近江には薬の知識をも  
つ多数の渡来人が定住、そ  
れらを見つけ活用しました。  
万葉集の有名な歌「あか  
ねさす紫野行き標野行き…」  
は蒲生野で大海人皇子（お  
あまのおうじ）が狩猟す

園を伊吹山で開かせる一方、甲賀などでは山伏や忍者が各地から持ち帰った情報をもとにした薬づくりや行商売薬を業とする者が生まれました。

江戸時代の東海道や中山道には道中薬を売る店もでき、例えば栗東の和中散、日野の万病感応丸、彦根の赤玉赤神教丸が有名です。また幕末の頃、甲賀では

置き薬屋さんは話し上手で、子供には風船や折紙、奥さんにもちょっととした景品をくれたので大人気でした  
たが、今ではもうほとんど姿を消しました。(S・O)



### <3>

脇差、扇子、煙草入れ、矢立などと共に腰の周りを飾る実用を兼ねたファッショングアイテムの一つだったのです。

印籠に常備薬を入れた場合は「薬籠（やぐろう）」と

その昔、武士や富裕な商人の持ち物だった「印籠（いんろう）」は、その字から分

かるように元々判子（はんこ）と朱肉を入れるための携行容器でしたが、外にも色々な小物を入れたようです。美術工芸品さながらの漆・螺鈿・蒔絵・家紋など

呼ばれます。昔の衛生観念や状況は今とは雲泥の差で、出先や旅先で腹痛・下痢を度々発症、ために薬籠の中身は胃腸薬がとりわけ多かったです。とくに熊のかつたそうです。とくに熊の胆（い）」は古来腹痛などの

ちなみに今日、熊の胆の

消化器病に著効ありとされ、薬効成分（ウルソデオキシコール酸など）に胆石溶解、肝機能改善、腸の消化機能促進などの効果が確認され、医療で使われていますが、

今では化学合成で得られるので、熊もその点では安泰でしょう。



### 印籠の中身

入れました。良質な薬の产地として名高い近江の街道筋では、これらの薬を旅人

薬籠の薬を口移しに飲ませる、あのシーンが妙に懐かしくよみがえってきます。

(S・O)



<4>

世の中サプリが大流行り  
世の中サブリが大流行り  
なのは「いつまでも元氣で  
若々しく、長生きしたい」  
願望や煩惱を誰もが持つか  
らでしょう。別の角度から  
見ると、長寿や若返りを願  
うほど良い社会なんだと言  
えなくもなく、為政者が喜  
びそうな見解です。

さて、栄華を極めた秦の  
始皇帝（前3世紀頃）は、  
不老不死の薬を求めて臣下  
を地の涯まで派遣しました。  
東方海上の蓬萊など三神  
山（どうやら日本も含まれ  
るらしい）にあるという仙  
薬（仙人が飲むという長寿  
薬）を探して持ち帰るよう  
命ぜられた徐福という役人

### 不老不死の夢

は、多数の工人（三千人と  
いう説がある）を連れて出  
かけたものの結局見付けら  
れませんでした。

（硫化水銀）が不老不死薬だ  
と信じて自ら用いたためか、  
皮肉なことに「老」には届  
かない49歳で崩御しました。  
竹取物語にも不死の薬が

に定住し、中国の先進文明

を作ったかぐや姫から不死  
の薬を贈られた帝は「かぐ  
やに会えぬこの世で不死の

登場します。月へ帰ること

になつたかぐや姫から不死  
の薬を贈られた帝は「かぐ  
やに会えぬこの世で不死の

薬が何になろう」と嘆き、  
月に最も近い日本一高い山  
でこれを焼かせました。こ  
の後、この山は「ふじのやま」と名が付いたとか。

今では、薬や医学、周辺  
科学が進歩して人の長寿は  
段々と進んできました。哲  
学的な命題ですが、もし、  
より高度の長寿や不老不死  
が得られるとしたら、それ  
は人間にとって幸せなこと  
なのでしょうか？

(S・O)



<5>

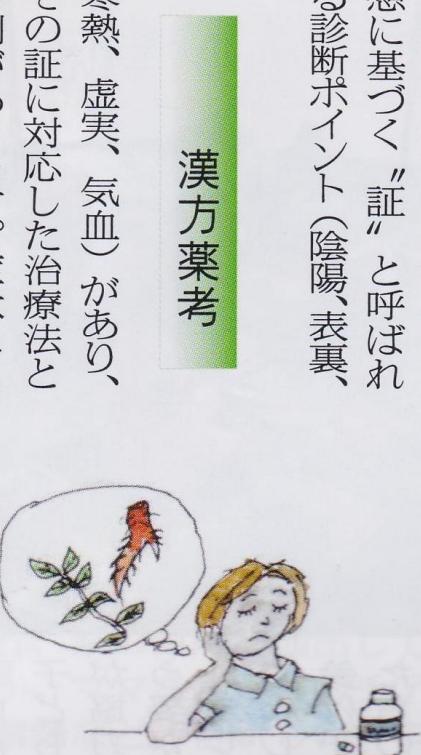
合より薬効Aが強く、薬効Bが弱くなる現象が古代中國で発見され、その後多くの方剤（漢方薬）が生まれました。

それは間違いです。植物や動物体由来の一部分を乾燥・切断・粉碎・抽出等で加工したものが生薬で、穏やかな作用を持つものが大半ですが、致死性毒劇物（例えばジギタリス、トリカブト）も少なくありません。

生薬を数種混ぜて方剤（処方薬）とすると、単独の場

漢方医学では、独特の思想に基づく“証”と呼ばれる診断ポイント（陰陽、表裏、

不十分な点が、科学に基盤を置く近代西洋医学との大きな違いです。そのため、わが国では漢方医の公的免許制がなく、「漢方専門」と



### 漢方薬考

寒熱、虚実、気血）があり、その証に対応した治療法と方剤があります。症状により方剤中の生薬量のさじ加減や、新たな生薬の加味が行われます。証は漢方医が

主観的かつ経験的に判断するもので、総じて科学性に

種近くの漢方薬の有効性・

一方、わが国では150

あつてもレベルは様々で、いまだにマイナーな存在です。

近頃、漢方薬もどきの怪しげで高価なサプリが巷に出回り、人々を惑わせてしますので、こちらも用心しましょう。

(S・O)



<6>

です。

1932年、ドイツのバイエル社研究員G・ドーマークは、生きた細胞や細菌をその頃発明されたアゾ色素で染め、顕微鏡観察していいたところ、プロントジルという赤色染料を使つた時には細菌が死滅して失敗しま

小さな傷でも細菌が入ると化膿して腫れ、それを放置すると段々酷くなり、激痛・高熱が出ます。そして遂には細菌が血管に入つて増殖し、血や組織が腐る敗血症になり死に至ります。

第一次大戦の頃、これを防ぐには傷の洗浄・消毒・包帯・焼きごて・手足切断などが頼りでした。しかし、今では抗生素など優れた抗菌薬があるのでまず安心

### バイオニア



する段階を進めていた時、折しも彼の幼い娘が重篤な連鎖球菌感染症に罹りました。迷いを振り切り、プロントジルが抗菌薬として使えるかも」と気付き、さっそく詳しく調べたところ、多くの細菌で同じ結果が得られました。

そして、動物を使ってプロントジルの有効性を確認

した。しかしこれは「プロントジルが抗菌薬として使えるかも」と気付き、さっそく詳しく調べたところ、多くの細菌で同じ結果が得られました。

その後、多くの優れたサルファ剤が開発され、ドーマクはその功績により1939年ノーベル医学生理学賞に決定。ところがナチスドイツの国民への授賞が禁止となつたことから、一旦は辞退しましたが、第二次大戦後に改めて授与されました。

話です。

ファーストペンギン（天敵がいるかも知れない海に群れの中で最初に飛び込むペンギン）として、わが子を一か八かの実験に使うなど一見無茶な話に思えますが、さていかがなものでしょうか。

(S.O)



<7>

保健用食品＝トクホ）とか「機能表示食品」と包装に書かれたサプリは消費者庁届出済の一応信頼できるものです。



<7>

分業制が数百年前から採用され、一般化したとする説が有力です。

一方、日本では昔から医師は「薬師」（くすし）とも呼ばれ、診察・治療・薬の処方・投薬・薬の供給管理のすべてを担つてきました。

「前は病院で薬貰えたのに今は薬局に行かんならんで、かなんわ」とぼやく声を時々耳にします。

### 医薬分業

ところが西洋では「病院で診察を受け、医師発行の処方箋を町の薬局に持つて行き薬を貰う」方式の医薬分業が昔から普通なのです。

その昔、医師が薬を持つと王侯や重臣が暗殺されかねず、ために西洋では医薬

明治初期に公的な薬剤師資格が生まれましたが、当時は西洋薬の国産自給が国策で、彼等は主として薬の製造・流通に携わりました。

薬剤師が近代化した大病院に勤めるのは概ね20世紀以降で、その後も長く医師

の補助が主たる業務でした。増すようになりました。

平成に入り、国は医療事

故防止と医療費（昨年4兆円）の25%を占める薬剤費削減の一環として、外来処



医薬分業の主な利点は①医師が診察・治療に専念できる②治療内容の透明化が図れる③病院での過剰な投薬をなくせる④薬剤師による処方箋の確認や副作用の有無を対面・対話で確認でき、服薬指導によって事故を防げる⑤複数の病院で受診している患者の処方薬が点検できる⑥薬局で投薬履歴を保管し活用できる⑦医療のグローバル化に資するなどが挙げられます。

少し回り道になりますが、かかりつけの調剤薬局を極力利用なさって下さい。

(S・O)



<9>

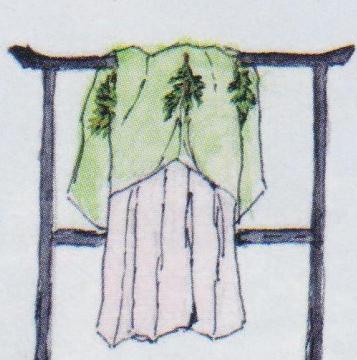
邪気や悪霊が体内に入り込むことによって発症し、祈禱や薬によって邪気や悪霊を追い出すと病気が治る」とする思想があり、それが天平～平安期に日本に伝わったそうです。

当初、薬草などのハーブ

### くすりと「服」

薬でよく使う服薬、服用、内服、頓服、分服などの言葉に含まれる「服」ですが、今では服は“飲む”という意味を示していて、正式ではないようですが「薬を服（の）む」のように使われることもあります。

衣服に吊るす、貼りつける、縫い込むなどの方法で邪気や悪霊を追い出したそ



た用語だと思われます。数種の薬草を浸けた屠蘇酒で邪気を払って新年を祝うのも服薬に通じる習慣です。その良い服は人の心を浮き立たせ、活動的にさせる」というコンセプトに基づいて、一般はもちろん、障害を持つ人にも重宝される機能的でデザイン性にすぐれた服を世に送り出しています。その鶴丸さんは地元紙の大分合同新聞に29回にわたって「幸福の服」というコラムを連載、平成28年度の吉川英治文化賞を受賞されました。

「服」と「薬」とは一体どうですが、そこから「服薬」という言葉が生まれました。

ところで、大分市内に「服は着る薬」という、服飾デザイナーの鶴丸礼子さんが経営するお店があります。

「服は着る薬」という新しい発想は、人を元気に幸せにするという意味で、先に書いた「服薬」の語源に通じるものがあり、興味深く感じました。（S・O）



<10>

18世紀、この物語を読んだイギリスの作家ウォルプールは「偶然と才気によって探してもいなかつたものを発見する」という意味の「セレンディピティ」という言葉を新しく創りました。

ペルシャの昔話をもとに書かれた「セレンディップ」の三人の王子たち」というおとぎ話があります。

昔、セレンディップ国（今のスリランカ）の3人の王子たちが旅の途中で様々な出来事に出会い、その都度、知恵と機転を働かせて難問を解決、予想もしなかつた幸運をつかんだ、要約すればこんなお話です。

科学や薬の世界でもセレ

誰でも悲喜こもごも、大小様々な偶然の出会い!!一期一会があります。何気なく見過ごしてしまったものもあれば、その後の人生に大きな影響を与えるものもあるでしょう。

た。

しかし、実はこの失敗が

一期一會、日常での様々

ある日、細菌の純粋培養をしていたところ、青カビが紛れ込んで一緒に培養されてしまい実験に失敗しました。

その後、多数の抗生物質が登場し、それらは医療の中で最も重要で不可欠な薬となりました。

一期一會、日常での様々

ンディピティが重要な発明・とんでもないセレンディピティの序章だったのです。よく見ると培養器の中では青カビの周りだけ細菌の培養が阻止されており、彼はこの原因が「青カビが細菌の生育を抑える物質を產生しているのだろう」と考えました。それが糸余曲折を経て世界で初めての抗生物質ペニシリン発見につながったのです。

発見をもたらす例が多くあります。

英國のA・フレミングと

いう研究者は90年ほど前の

この原因が「青カビが細菌

の生育を抑える物質を產生

しているのだろう」と考

みました。それが糸余曲折を

経て世界で初めての抗生物

質ペニシリン発見につなが

ったのです。

しかし、実はこの失敗が

たいものです。(S・O)





<11>

藩での富山売薬を懇願したことが契機となつたそうです。

これ以降、富山藩では薬業（製薬、売薬、行商売薬）を奨励し、藩主の曰く「用を先にし、利を後にして医療の仁恵に浴びせざる寒村僻地にまで広く救療の志を貫

に一つ置き、約半年に一度訪問してはその間に使った薬の補充と代金を徴収するシステムです。しかし、社会環境の変化により、わが国では昭和後期頃に衰退しま

ニセフ（国連児童基金）、JICA（ジャイカ・国際協力機構）等の支援のもとに国家事業として配置薬システムの普及が図られています。



### 甦る置き薬

越中富山の薬売りといえば置き薬で有名ですが、全国に広まつたきっかけは元禄時代に起こつた「江戸城腹痛事件」にあります。

元禄3年（1690）、江戸城内で急な腹痛に見舞われた三春藩主に富山藩主前田正甫が持ち合させた自藩の薬「反魂丹」を与えたところ劇的に腹痛が治まり、これを知つた多くの大名が自

通せよ」と「先用後利」の理念尊重を求めました。さらに江戸時代後期にはこの理念から配置薬ビジネスが生まれ、庶民の保健に大きく貢献しました。

ところが現在、タイ、ベトナム、モンゴル、ミャンマー、ラオスなどの発展途上国では、公益財団法人日本財団、

(S・O)



<12>

かずもどかしい様ですが、「天井から目薬」になると効果がない状況を表します。さらに「自家薬籠中のもの」。これは人、物、知識や技術が身に付いて隨時思う通り

薬の字が入った諺（ことわざ）は昔から数多く伝えられています。

中でも「良薬口に苦(にがし)」、「酒は百薬の長」がありますが、前者には継ぎがあるのですが、前者には継ぎがあって「忠言耳に逆らう」（忠言は聞いて快いものではないが、身のためになる）を

皮肉です。よく使われる「手薬練（てぐすね）」を引いて

自在に使いこなせることで、昔の人は薬を上手に使つていたことが伺われます。

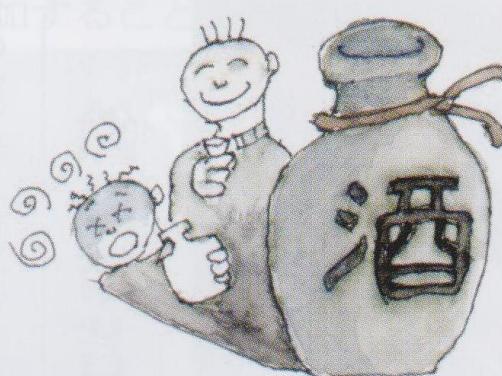
待つ」の薬練は松脂（まつやに）のこと、それを手に塗って（引いて）滑り止めとし、相手（敵）が来るのを準備万端整えて待ち構えます。

「薬が調合される時そこに毒が入るように、徳が組み合わされる時そこに不徳が入る。知恵は徳と不徳をうまく調合し、人生の不幸に對して役に立てる」。

これは17世紀フランスの文学者ラ・ロシュフコールの残した含蓄のある名言です。少量の毒が薬に調合されて良薬ができるように、徳と不徳を知恵という器の中で調合すると人生また楽しからずや、聖人君子ばかりでなく分からぬ方がお経のように有難味があるという

ことを表します。

一方、薬にまつわる金言は世は味氣ない、という意味でしょうか。（S.O）



け紹介します。

一年間にわたって連載しました京都薬大名誉教授

本欄は今回で終了します。